



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



永遠のいのち

主任司祭 小西 広志 神父

ミサの中で二回、「永遠のいのち」という言葉が登場します。一回目はミサの始まりの時に回心の祈りの後で「全能の神がわたしたちをあわれみ、罪をゆるし、永遠のいのちに導いてくださいますように」と司祭は唱えます。二回目は第二奉獻文の中です。「なお、わたしたちをあわれみ、神の母おとめマリアと聖ヨセフ、使徒とすべての時代の聖人とともに永遠のいのちにあずからせてください」

「永遠のいのち」とはいったい何でしょうか。言葉だけの感覚ですと、なんだかこの世のいのちを終えて、神さまのもとでそれこそ永遠に生きながらえることを考えてしまいます。本当にそんな意味でよいのでしょうか。「永遠のいのち」についてはいろいろと難しい説明もできるのでしようけど、わたしなりに考えていることをここで皆さんに分かち合いたいと思います。

今からもう40年近くも前の体験です。だいぶ昔のことですから、実名をあげてもかまわないでしょう。わたしが働いていた老人施設に耕よし子さんという方がいらっしゃいました。わたしたちは親しみを込めて「ヨシさん」と呼んでいました。ヨシさんのご主人さまは耕治人さんと言いました。この方は最後の私小説家あるいは白樺派作家と呼ばれた方です。私小説と言っても、若い人には分からないでしょう。小説家の身辺に起こった出来事を作品に仕上げっていく手法が私小説です。だからという訳でもないでしょうけど、私小説家たちの生き方はどこか人間くさい、不器用なところがありました。治人さんもそんな人だったようです。奥さまのヨシさんが支えて生きておられました。二人の生活は貧しいものでした。電気冷蔵庫も電気洗濯機もないような生活でした。次第にヨシさんが認知症の症状を見せ始めて、生活に困るようになりました。行政機関の働きかけがあって、ヨシさんは、最初はデイサービスへ通うようになり、最終的に老人施設に入居なさったのです。

それからしばらくして、治人さんも体調を崩し大きな病院に入院しました。ヨシさんをお見舞いのためにそこに連れて行くと、「ご主人ですよ」との呼びかけに「そうかもしれない」と答えられました。その出来事をモチーフに治人さんは晩年の短編『そうかもしれない』を発表しました。実は、ヨシさんは「そうかもしれない」と答えた後に、「どんなご縁で？」と小さくつぶやかれたのを覚えています。

治人さんはヨシさんとの晩年の生活から作品を紡ぎだし、世間の注目を浴びました。お読みになった方もいらっしゃるかもしれません。

ヨシさんは、その後、次第に弱っていきました。最後は寝たきりになっての生活でした。口元でいろいろなことをつぶやいておられましたが、何を言われているのかは分かりませんでした。でも、いつもつぶやきながら過ごしておられました。そして、職員が関わると小さな声で「ありがとう」とつぶやいて、澄んだ眼で相手を見つめられました。その表情に職員の誰もが魅了されていきました。ある日、窓の外の青い空を眺めながら、ヨシさんはこうつぶやきました。「わたしはね、人のキレイなところだけを見て生きたいの」。わたしはハッとして、聞き返そうとしましたが、そこにはいつもの口元で小さく何やらをつぶやいているヨシさんがいました。

ヨシさんのそれまでの生活は苦しいものだったそうです。収入が途絶えたご主人の代わりに、お花を教えたり、俳画のお教室などをして生活を支えたそうです。ある有名作家の遺族との係争でも、ずいぶんと苦勞なされたそうです。人からだまされ、裏切られることは度々あったことでしょう。それでも「わたしはね、人のキレイなところだけ見て生きていきたいの」と願いながら、だまされ、批判され、赤貧を洗うがごとの生活を続けながら、ヨシさんは生きてきたのです。青空の広がる空の先にある何か大切なものを見つめながら。

11月、死者の月になるとヨシさんのことを思い出します。「わたしはね、人のキレイなところだけ見て生きたいの」は、ヨシさんの生き方を表す言葉です。そして、はかなく、壊れやすいこの世にあって、永遠に続くいのちを見いだした人の言葉にわたしは聞こえてきます。この世は空ろなものです。空ろなものに「一喜一憂しながら生きていくのが人間の「生」だ」と思います。それでも、何か大切なものが隠されていると願い求めて生活する。それがわたしたちの「いのち」の姿のように思います。「永遠のいのち」を求めるとはそんなことではないでしょうか？